

A vertical photograph of a calm river or lake. The water is still, acting as a perfect mirror for the sky and the surrounding landscape. On the left bank, a dense line of trees is in full bloom, their branches heavy with light pink cherry blossoms. The trees' dark trunks and branches are reflected clearly in the water. The sky above is a pale, hazy blue, suggesting a clear but slightly overcast day. The overall mood is peaceful and contemplative.

漢詩を味わう

第93回

# 無題 寒山

人生 不滿 百  
人生 百に満たざるに

常 懷 千載 憂  
常に千載の憂いを懐く

自 身 病 始 可  
自身 病い始めて可えしに

又 爲 子 孫 愁  
又た子孫の為に愁う

下 視 禾 根 下  
下は禾根の下を視

上 看 桑 樹 頭  
上は桑樹の頭を看る

秤 鎚 落 東 海  
秤鎚 東海に落つ

到 底 始 知 休  
底に到ってはじめて休むことを知る

人の一生は百年にも満たないのに、常に千年もの憂いを抱いている。

自分の病がやつと治ったと思つたら、

今度は子や孫のことまで心配してやらねばならない。

たとえば稲の根本の育ち具合を調べるのに下の方を覗いたり、

桑の木伸び具合が気になるので上の方を仰いだり、心配なことばかりだ。

こんな苦勞はいつ果てることか。それは分銅が海に落ちた時。

落ちて海の底まで沈んでしまつたら、初めてもうこれで万事休すと諦める。

《可》 病気が治ること。痊可ともいう。

《禾根》 稲株の根もと。

《秤鎚》 分銅のこと。

《東海》 単に海のこと。中国の地理で海は東にある。

《到底》 海底に到達すること。

《休》 万事休すの休。

伝説のヴェールに包まれた寒山という人物は、その生きた時代も足取りも確かなことは分かりません。じつは実在した人物かどうかもまったく不明です。単なる伝説上の人物ともいわれますが、寒山という山中に幽居する

隠士の存在は、宗教的な敬意を込められて信じられ続けてきました。寒山の詩がまとめられたのは唐の末期から五代のころといわれます。

閩丘胤という人物が寒山と拾得の存在を知り、彼らの残した詩を蒐集して「寒山詩集」を編纂したのが始まりと伝えられます。寒山は一説に唐時代の貞観年間（六二七―六四九）の人とも大暦年間（七六六―七七九）の人とも伝えられる詩僧です。このような伝承の背景となっていたのが、天台

教の中心地だった浙江省の天台山だったようです。寒山は同じ天台山の僧拾得と親交があり、二人は数々の奇行で知られれば画題となり、また日本では森鷗外の短編「寒山拾得」によっても親しまれています。しばし

ば寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩の化身として語られます。現在残されている三百首余りの詩の内容は多岐にわたっていて、禅の高遠な思想を説いて山居の喜び、自然の美しさを純粹に歌い上げる一面、俗人を罵り、肉食や財欲を戒めるアキが強いともいえる詩風も持ち合わせていま

す。詩の最大の魅力は、政治の世界から離脱した「自由」の境地に立って詠んでいるということにあるようです。有名な唐代の詩人は、そのほとんどが官吏を経験しています。官吏の途から離れて超俗的な隱棲の詩を詠んだ詩人もいますが、寒山は根本的に政治世界から離れたところで詩を作っています。

寒山詩のほとんどが無題で今回取り上げた詩も題名がありません。冒頭の二句「人生百に満たざるに、常に千載の憂いを懐く」は魏・晋の時代にかけて作られた古詩十九首にも見える句です。自分の病気に不安を抱き、子供や孫のことを心配し、それは人間の宿命のようなもの。そして死んだら

漸くおしまい。万事休すと寒山は言い放ちます。今も昔も変わらぬ人間の性を禅宗の頓悟の境地に立って表現している詩です。いわゆる唐詩の一般的な格からは外れた詩といえます。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩の辞典（大修館書店）・中国詩人選集（岩波書店）

君去らば春山誰と共に遊ばん 鳥啼き花落ちて水空しく流れん 如今別を送って溪水に臨む 他日相思わば水頭に來たれ



《大意》君が行ってしまったえば、山の春を訪ねて歩くのも誰と一緒に行けばよいのか。鳥が啼き、花は散り、水は流れゆく、あの春景色もすべて空しいことだ。今ここに谷川の流れのほとりで、君の旅立ちを送る。いつの日か私のことを思ってくれるのであれば、水のほとりに来て今日の別れを思い出しておくれ。(劉商詩・王水を送る)

宿雨松篁の色 新晴燕雀の聲



《大意》昨夜来の雨は松や竹の色を鮮やかにし、晴れた日には燕や雀が盛んにさえずっている。(范石湖)



読み 文章 政理に通ず (文章は翰墨風流ばかりではなく政治上の理にも通ずる)

文章  
政理  
通

佐藤象雲書

第一画点と第三・四画の交叉点を  
中心線上に

起筆の位置と払う方向に注意

「章」は「音」と「十」の会意文字で、音楽と数の終わりの意。  
音楽が一区切り終わったことを表している。

「立」扁平に。  
下部は縦画を貫通させず「早」なように。

旁を右に寄せ過ぎないように

落差

偏の横画は下方に随って右上がり強い

参考まで唐時代の代表的な二碑のシンニユウを掲載してみた。  
九成宮醜泉銘は左側がほぼ直立して、安定感と強さがある。  
これに対して孔子廟堂碑は左側を低くやや寝かせ気味にして  
横波の暢びやかさを強調している。

九成宮醜泉銘

孔子廟堂碑



一般部規定課題出品について

- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

文章通  
政理

文章通  
政理

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

次号課題

隸書

迷者不  
問路

文章通  
政理

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

迷う者は路を問わず

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	散る桜	順位	氏名
		残る桜も散る桜 一良寛一	

和泉 溪石 先生書



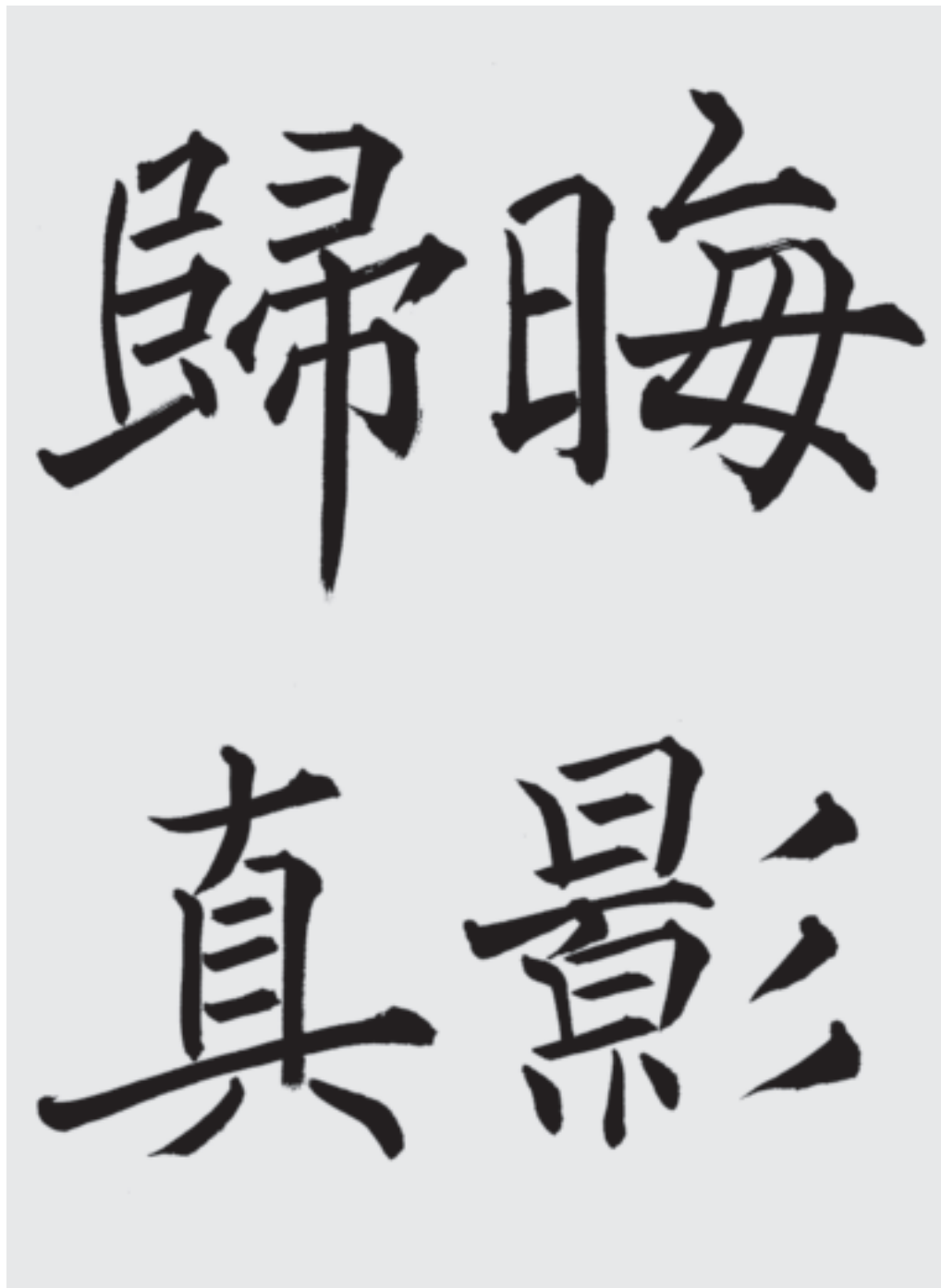
佐藤象雲書

音

ジランシケイ  
ジヨシヨウシセイ

略解

忠孝の道を尽くすには幽谷の蘭が芳香を放つように  
松が冬でもしほまざいよいよ盛んに茂るように



影を晦まして真に帰る

褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書(35)

象雲臨

『晦影歸真』

雁塔聖教序は太宗の御製による「三藏聖教序」と、当時皇太子だった高宗による「述三藏聖記」の二碑をさします。太宗は西暦六四九年に崩御し、本碑が建てられた時には高宗の時代でした。太宗は文皇帝と諡号されたため、この碑の冒頭には「大唐三藏聖教序太宗文皇帝製」と刻されています。褚遂良は太宗の遺言により高宗にも重用され本碑を書いています。のちに高宗が武昭儀を皇后に冊立しようとしたことに反対したため、武昭儀が則天武后となつてからは冷遇されて、現在のベトナムまで左遷されて本碑を書いた六年後に不運のうちに没しています。

さて今月の四文字中の三文字は偏旁からなる字です。偏旁で組み立てられる字は揖讓法といって、偏と傍の何れに勢を譲るか字によって異なります。今月の「晦」は旁を大きく、「影」は偏に勢を譲り、そして「歸」は偏旁の勢を略二分しています。



辭折安所

辭折安所

象雲臨

■孫過庭・書譜（初唐・西曆六八七年）の臨書（17）

『辭折安所』

前回述べたように書論の草稿であるこの書譜には佳言名句が多く本欄でも、言葉の意味を考えながら草書を覚えるために、なるべく文節の臨書となるよう心掛けていますが、今月は残念ながら文節ではないための四文字では意味を持ちません。しかしながら美しい線の流れと、自然に姿態が変化して草書の典型美ともいえる四文字です。草書には単体で書かれている独草と二文字三文字と続けて書かれている連綿草との別がありますが、この書譜は連綿は少なく、今月の「安所」ように続けてはいても至極自然で、連綿することによって字形が極端に崩れることはありません。現代では日常に於いて草書に触れることは殆どなくなりました。草書は簡略体ですので古典を踏まえて覚えないと誤字にもなりやすく、可読性という観点からもこの書譜のような正しい書体を習得することが大切です。